



直会市
～みのりを祝う、旬をかこむ～
「直会」とは、神事の後に神様と共に食をいただく古来の習わしです。この「直会市」はその心を受け継ぎ、自然の恵みに感謝しながら「農と祈りをつなぐ」新しい形のファーマーズマーケット。食の聖地丹波篠山の農家の方と交流しながら、篠山春日神社で旬の食材を楽しんでもらいたいと企画されました。

～みのりを祝う、旬をかこむ～
「直会」とは、神事の後に神様と共に食をいただく古来の習わしです。この「直会市」はその心を受け継ぎ、自然の恵みに感謝しながら「農と祈りをつなぐ」新しい形のファーマーズマーケット。食の聖地丹波篠山の農家の方と交流しながら、篠山春日神社で旬の食材を楽しんでもらいたいと企画されました。



篠山子ども狂言「春の発表会」
日本の素晴らしい伝統芸能、未来へ！
狂言は、元来子どもが演じるために作られた芸能ではなく、幼少の子どもが演じるには難しい内容が多いそうです。セリフは長く難しいのですが、練習を重ね堂々とした発表を見せてくれました。また、国際博をきっかけに、丹波篠山にちなんだ新作ストーリーも披露してくれました。



「学び続ける人は輝いている」をモットーに活動を続けるひょうごカレッジさん。今回は丹波篠山国際博として開催。丹波篠山市史編さん委員長の今井進さんによる「黒豆が伝えてきた丹波篠山の食文化」の貴重な講演など、丹波篠山を盛り上げたいと思いを強め、盛会に導きました。



「農村(農の都丹波篠山)×能村(丹波篠山の伝統芸能)～文化を体感し、新しい文化を創る～」を、一般社団法人AZEが、田園風景の中での「能」の観賞会や、農業体験など、丹波篠山の魅力を広げようと企画されました。



地域資源や食の魅力を全国へ発信。地域住民に呼びかけ、丹波篠山の魅力を再発見しようとするさまざまなチャレンジがありました



未来へのバトシ

丹波篠山国際博 ～美しい農村、未来へ～



企画から3年かけた国際博事業は、令和8年3月31日をもって閉幕しました。私も国際博副実行委員長として携わりました。今回はそんな視点から、国際博での市民の取り組みを、ほんの一部ですがお伝えします。



国際博のさまざまな活動
オープニングは、篠山城大書院を舞台に、能とプロジェクト三の丸南広場の生ライブ。篠山城跡三の丸南広場を活用し篠山牛の丸焼きなどを提供した「うまいもんお城横丁」。雨や寒さ、周知の難しさもありましたが、皆さんの協力、多くの来場者に喜ばれました。



「丹波篠山国際博」を振り返り感謝の言葉 ～丹波篠山国際博正副実行委員長一同～

国際博は、準備期間を含めると、約3年にわたる大きなプロジェクト。私たち実行委員はそれぞれ、地元を愛する一人として関わらせていただきました。この国際博の真のテーマは、観光客を呼ぶこと以上に「自分たちの足元を見つめ直し、未来を考える」ことでした。新しく企画をし、実施したプロジェクトは100近く。3日に1回のペースで、市内のどこかで誰かの思いが形になっていた計算になります。「うちの地域には、何も無い…」そんなことはありませんでした。同じ市内でも知らなかったお互いの活動を知ることで、人口減少社会における「未来の地域の姿」が少しずつ見えてきた気がします。外部から何かを持ってくるのではなく、変化を拒絶するのでもない。「集まって、共に歩んでいく」それが集落であり、コミュニティの本質なのだ改めて実感しました。



賛否両論、試行錯誤の連続でしたが、心から「やってよかった」と断言できます。関わってくださった全ての皆さん、応援してくださった皆さん、また丹波篠山を築いてくれた先人の皆さんにも感謝の気持ちでいっぱいです。丹波篠山は、国際博の思いをのせて、新たな未来へ向かいます。本当にありがとうございました。

左から、副実行委員長 藤原 岳史さん、実行委員長 小田垣 昇さん、副実行委員長 堀 成志さん、同 畑 弘恵さん (リポーター)、同 山下 由晶さん

誇りある美しい農村、丹波篠山。共に未来へ！
この国際博は、「丹波篠山が地方創生の星となり、日本の美しい農村を未来へつなぐ」という思いから始まりました。そしてこの一年で、私たちは確かな手応えを得ることができました。その一つが、二地域居住などを通じた関係人口という新しい関わり方の広がりです。また、大阪観光局との連携から、食を通じて地域と地域をつなぐ美食街道プロジェクトも始動しました。しかし、私たちが最も大きな成果だと感じているのは、開催された約250の祭りやイベントを通じて、私たち自身がこの地域の価値を改めて実感したこと。阪神間から近い距離にありながら日本の原風景ともいえる里山を持つ、誇りある美しい農村、丹波篠山。「食の聖地、農の都」、「受け継がれてきた文化芸術」、「豊かな自然と景観」、「人と人との温かいつながり」、これら全てが私たちの宝です。だからこそ、今は終わりではありません。ここからがスタートです。私たちが誇りを持ち、多くの人とともにこの地域の魅力と活力を次の世代へつないでいく。それが、私たちの使命です。この美しい農村、丹波篠山を次の世代へ、そのまた次の世代へ。誇りを持ってつないでいきましょう。共に未来へ！

小田垣昇委員長が語る 丹波篠山国際博